

# 移動博物館「古い道具と昔の暮らし」について

佐藤 琢<sup>1)</sup>

A Report of “Life and Tools in Old Days” by the Delivery Lecture for Elementary School

Taku SATO

key words: 教育普及、移動博物館、出前授業、博学連携

## 1 はじめに

青森県立郷土館では教育普及分野の事業として移動博物館・出前授業を行っている。「青森県立郷土館の小・中学校を対象とした移動博物館について」渡辺(2008)、及び「青森県立郷土館の小・中学校を対象とした移動博物館についてⅡ」佐藤(2009)で移動博物館についてのアンケートを分析した結果、最も多く依頼されているテーマが「古い道具と昔の暮らし」であると確認できた。本館の移動博物館・出前授業は一件ごとに依頼した教員と打合せしながらその内容を決定している。しかし、テーマが同じである場合には用いる資料や活動内容が似通ったものになることが多い。そこでもっとも利用の多い「古い道具と昔の暮らし」については、ある程度の一般化を図るべくその内容をまとめてみたい。

## 2 単元について

小学校学習指導要領は平成20年に改訂され、平成23年から全面移行となる。来年度以降も「古い道具と昔の暮らし」の内容で出前授業の利用が多いことが予想されるので、今まで行ってきた「古い道具と昔の暮らし」がこの新しい指導要領の中でどの部分に当たるのかを確認する。

「小学校学習指導要領 第2章 第2節 社会」の「第2 各学年の目標及び内容(第3学年及び第4学年)」に書かれている以下の部分が、ここで扱う「古い道具と昔の暮らし」に該当すると考えられる。

### 1 目標

(2) 地域の地理的環境、人々の生活の変化や地域の発展に尽くした先人の働きについて理解できるようにし、地域社会に対する誇りと愛情を育てるようにする。

### 2 内容

(5) 地域の人々の生活について、次のことを見学、調査したり年表にまとめたりして調べ、人々の生活の変化や人々の願い、地域の人々の生活の向上に尽くした先人の働きや苦心を考えるようにする。

ア 古くから残る暮らしにかかわる道具、それらを使っていたころの暮らしの様子

これらの道具は時代の移り変わりとともに廃棄されてしまう場合がほとんどであり、児童の家庭から持ち寄って授業することは困難である。実物を用意することが困難である場合は教科書や資料集、インターネット等の写真や画像を用いて授業を行うが、その場合児童の理解や考えが表面的なものになりやすいという問題が生じる。したがって、出前授業で最も要求されるのは、見学したり、調査する対象である道具を準備することである。子どもたちが予備知識なしに道具に触れることで、より自発的にわき上がる疑問や発案、ひらめきを重視するために解説をなしにして道具だけあればいいという依頼もある。しかし、道具にはそれらを使っていた頃の暮らしとの関わりがあるため、学習指導要領にあるように、生活の変化や人々の願い、先人の働きや苦心を自分のこととしてとらえ考えるためには、道具を使っていた頃の時代背景や暮らしの様子、当時の価値観などを正しく知ることが必要だろう。そのために専門家である民俗の担当者に同行してもらうようにしているし、解説が重要であると考えている。また、移動博物館・出前授業での「古い道具と昔の暮らし」では、①全体指導・導入、②衣食住のコーナーごとの解説、③自由体験活動の内容で実施する場合がほとんどである。解説をしてから体験という流れで行う理由は、子供たちの認識の変化にある。解説で道具に対する理解が得られた場合と解説を行わない場合を比較すると、その違いが顕著に感じられる。子供たちにとって古い道具というのは今あるものよりも価値が低い、たとえば性能が悪いとか使いにくいといった欠点があるために使われなくなったものだという認識があるように思われる。しかし、本来は性能や欠点に不満を持ったからこそ改良され今の道具があるわけで、当時の人々にとっては最新式の便利なものであった可能性は十分にある。したがって、現在の価値観だけではなく、当時の人々がどうとらえていたのかを解説することによって、子供たちの道具に対する認識がただの古くさいものから昔の人が大事にしていた価値あるものへと変化することが多く、体験で触れさせた際に道具の扱いが丁寧になり、破損することがなくなるのである。

以上のように、現在の「古い道具と昔の暮らし」の内容は解説と体験を両輪として、学習指導要領に対応できると考えられる。

1) 青森県立郷土館 研究主査(〒030-0802 青森市本町2-8-14)

### 3 「古い道具と昔の暮らし」の解説内容

古い道具と昔の暮らしの解説では、資料を衣生活・食生活・住生活の3つのコーナーに分けて展示し、それぞれのコーナーのテーマにあわせた解説をする。最初に全体で年代の確認も含めた導入を行う。まず、衣食住という言葉を知っているか確認し、資料が衣食住の3つのコーナーに分かれて展示されていることを確認する。次に、「古い、昔という言葉が出てくるけれど、どのくらい昔なんだろうか」という発問を行い、子どもたちが考えている年代・時代を確認する。発問に対する答えとしては、具体的な数字で答えるもの（20年前～1000年前が多い）、年号や時代で答えるもの（昭和、大正、明治、江戸時代など）が多い。しかし、それらの時代についての明確なイメージを持っているわけではないため、第2の発問として「今日持ってきた道具は、みんなが毎日使っている形のないある3つのものがなかったり、近くにないので使えなかった時代の農家の人たちの道具です。ある3つのものとはなんだろうか」と問いかける。答えは電気・ガス・水道であり、だいたい子どもたちは自分で気づくことができるが、気づかない場合はヒントを出して答えを引き出すようにする。さらに興味を引き出すために「今日家に帰ったら電気・ガス・水道が使えなくなっています。どんなことが困るかな」という発問で、自分に当てはめさせて考えさせる。電気がないと暗い、冷蔵庫の中のもの腐ってしまう、お湯が沸かせない、料理ができない、水が飲めないなどの答えが出たところで「昔の人々はそれらのものがなくても普通に生活していた。どんな工夫や苦労があったのか」と本時の内容に期待や疑問をもたせ、それぞれのコーナーに分かれて解説を行う。

#### (1) 衣生活

衣生活のコーナーでは、昔の衣服について、洗濯について、アイロンについての3つの内容を主に取り上げて解説する。

##### ① 昔の衣服について

解説は以下の流れで行う。

- ・衣服には洋服と和服の2種類があり、この解説では着物について解説することを確認する。

衣服は大きく洋服と和服の2つに分かれる。洋服は外国から日本にもたらされたものであり、和服は古くから日本人が着てきた着物であるという程度の認識でよい。児童は浴衣のようなものであればすぐに思い出すことができる。また、着物は昔、洋服は現在と分けてしまうのではなく、だんだんに着物を着る人が少なくなったことを説明する。洋服については流行はあるものの、その構造については今と大きく変わることがないため、着物について解説することを話す。また、衣服で大きく変化していくのは布の材質であるため、必ず解説中に材質の変化について触れるようにする。

- ・麻の着物を見せ、どのようにして手に入れたかを考えさせる。

ここで見せる農作業のときに着るみじかと呼ばれる種類の着物は素材は麻で、こぎんが施されている。みじかとはそのままの短い着物のことで上着に当たり、下半身には股引をはく。まずはこの着物を実際に見せ、児童の興味を高める。次に「農家の人たちはどうやってこの着物を手に入れたのだろうか」と発問する。児童の答えとしては最終的に買ったか作ったかの2つに集約される。ヒントとなる補助発問としては「皆さんの服はどうやって手に入れたか」とし、買うという方法に気づかせる。ほとんどの児童は作ったという答えを選ぶようだ。さらに「作ったのはなぜだろうか（買わなかったのはなぜだろうか）」と発問する。児童の答えとして貧乏だから、お金がなかったからというものが多い。この理由は、着物の縫製が荒いことで、現在の既製品と比べて遙かに雑に見えてしまうため、ぼろの服を着ている＝貧乏という図式ができあがるからではないだろうか。実際には裕福でない農家は多かったようであるが、服も買えないほど貧乏であるというのは疑問である。そこで、補助発問として「農家の人たちは何のために米や野菜を作るのか」を考えさせ、それがお金を手に入れるためであり、労働によって賃金を得ている児童たちの家族と同じであることに気づかせる。農業が盛んな地域の児童はこのことにより早く気づく傾向にあるが、都市部の児童は（お金がないから）自分で食べるために作ることも少なくない。実際には交通機関が発達していなかったので買いに行くのが時間の面等で大変であったということを知らせ、作るという選択肢を選んだことを納得させる。

- ・麻で着物を作る工程について説明する。

どうやって作っていたのかを、実物資料とパネルを用いて説明する。使用する実物資料は、麻のかわ・麻糸・麻布（染める前と染めたもの）で、パネルは麻の写真と麻を蒸す釜や茎から繊維を取り出す様子を絵で表したものである。

材料である麻は、種を蒔き栽培することを説明し、写真パネルを見せる。成長に1年（春から秋）かかり、成長したものを刈り取って葉を落とし、茎のみを使用する。茎は大きな釜に入れて蒸し、柔らかくなったところで皮を削る。そうして取り出したものが麻のかわであり、麻のかわを糸車で紡いだものが麻糸となる。さらに麻糸を地ばた（機織り機）で織り麻布を作る。こうしてできた麻布は染物屋に出され、相応の布地と引き替えに藍で染められる。この布を母親などが服に仕立てるのである。

- ・麻布について調べさせる。

服にどのような工夫がされているのかを調べるためには、まずその素材である布を調べる必要がある。そこで、実際に布に触らせ、布の表面を観察させる。

布に触った児童の感想としては、堅い・ざらざらする・痛い、等があげられる。布に触らせるときには自分の服も同時に触って手触りの違いを確認するように助言し、このときに触る自分の服は一番内側に着ている白いシャツが最も適してお

り、逆にジャージやデニムなどの服は適さないことを伝える。この白いシャツは木綿のシャツを想定しており、麻布と木綿を比較させる意味を持っている。木綿は麻と比べると非常に肌触りがよいが、青森県の気候では材料の綿が育たないため寒くても育つ麻を使うしかなかったという事情があり、木綿は他県より輸入し都市部で販売されていたが移動手段に乏しいところでは買いに行くことができなかったことを知らせる。

また、表面を観察するとうしろが透けて見えるほどに目が粗く、糸と糸の間に隙間があることを確認する。さらにこの布から作った服では寒くて冬は過ごせないため、さらなる工夫が必要であることを話す。

#### ・麻の着物の工夫と制作の苦労について解説する

再度、麻の着物を見せ、どこに工夫がされているか観察させる。着物をよく見ると元の麻布のように隙間が見える裾や袖などの部分と隙間がなくなっている胴体部分があることに気づく。この胴体部分はどうやって隙間をなくしているのかと児童に質問すると、布を重ねるという予想を立てる。しかし、布を重ねただけでは隙間はなくなる。実際はその隙間に糸を刺し、刺し子にすることによって隙間がなくなり、冬でも暖かく着ることができる。これが1つめの工夫である。刺すというのは糸を通すということで、つまり縫うのと同じことである。さらに、刺したことによって布が厚くなり、破けにくくなるのが2つめの工夫といえる。3つめの工夫はこぎんである。こぎんを刺すことによって色やもようが変化し、大変美しく、おしゃれになる。しかし、着物の作成は、農作業のない冬のわずかな期間に母親によって行われるため、時間もかかり負担も大きかった。制作期間は2年ほどかかったと思われる。また、布や着物は絶対に捨てるということがなくとても大事にしていたことを伝える。

#### ② 昔の洗濯について

ここでは昔ながらの洗濯の道具である洗濯板の工夫について述べる。洗濯板は現在でもホームセンターなどで販売されており、とくに洗濯機でも落ちない汚れを落とすのに使われている。洗濯機が一般に広まったのは昭和30年代であり、それまでは洗濯板が主に使われていた。洗濯機以前の洗濯は屋外で水を使って行われるため、冬場はもちろんそれほど頻繁には行われなかったようだ。また、洋服と違って着物は布にばらして洗濯し、乾いたら再び仕立てたそうである。

#### ・洗濯板の工夫について

洗濯板にはU字型の溝が掘られており、その上には楕円形の凹みがある。この凹みには石けんを入れる。洗濯をすると石けんが流れてきて溝にたまるため、石けんの量が少なくてもきちんと洗濯をすることができる。裏表を逆にすると溝の向きが逆になり、水が流れやすくなる。こちらは洗剤によって泡だらけになった洗濯物をすすぐのに使われる。

#### ③ 昔のアイロンについて

昔のアイロンである炭火アイロンを調べさせ、その仕組みを理解させる。炭火アイロンについての疑問は、電源なしでどのようにアイロンを熱くするのかというその1点に集約される。児童の予想としては2分され、熱湯か炭を使うかである。そこで実際にアイロンを渡して調べさせる。アイロンの中には木炭を入れてあり、中を調べれば答えがわかるように用意してあるので児童たちは自分で答えを発見することができる。

#### (2) 食生活

食生活では、米を炊く道具や弁当箱から昔の食生活や時代による道具の移り変わり、道具の新旧にかかわらずよいところがあることを解説する。

#### ① 米を炊く道具

児童に朝食の内容を聞き、メニューをあげさせる。主食としてはご飯、次いでパン、麺類などがあげられ、やはり1番多いのがご飯である。昔の人はパンはあまり食べなかったとして、日本人が一番食べているご飯の炊き方について解説することを伝える。ご飯を炊く道具としてかまどを紹介し、そのつくりと使い方を解説する。洗った米をつば釜に入れ釜をかまどの上にセットする。かまどの上には釜の入る穴があり、つば釜のつばは穴に落ちないように釜を固定すると同時に、この穴をふさぎ熱が逃げるのを防ぐ。かまどの前面には薪を入れるふたと、灰を処理するふたがついており、薪の火で直接釜を熱する仕組みになっている。

かまど、ガス炊飯器、電気炊飯器を示し、一番美味しいご飯が炊けるのはどれかを児童に尋ねる。児童はかまどか電気炊飯器のどちらかを選び、より新しいという理由で電気炊飯器を選ぶことが多い。実際にはかまどのご飯が美味しいとされ、それは火力の強さに関係していることを説明する。また、かまどの欠点としては火の加減をするためにずっとその場についていなければならない、上手に炊くためには技術が必要であることをパネルを見せながら解説する。電気炊飯器はスイッチを入れるだけでだれでも同じようにご飯を炊くことができ、主に時間をとらないところに利点がある。このように、古い道具にも新しい道具にも良いところと悪いところがあることを確認する。

#### ② 食事の際に使う道具と食生活

いろいろある生活ではテーブルを使うことができない。そこで使われたのがお膳である。ここでは箱膳を紹介する。箱膳は主に下北地方で使われたもので、それぞれの家族に専用の箱膳があり自分で取り出して用意する。箱の中には食器が入っており、ふたをひっくり返して置きその上に食器を並べ、お膳として使うことができる。中に入っている食器の数も少なく、

ご飯茶碗、汁椀、おかず用の皿、漬け物などを入れる小皿ぐらいである。青森県の中でも白米を多く食べられたのは津軽地方を中心とした米の収穫量が多いところであり、それでもかきもの（混ぜもの）をして食べることが多かった。下北地方では白米を食べるのは正月やお盆など年に数回というところもあり、普段は粟や稗を食べていた。おかずの多くは野菜であり、魚は多く捕れるところの近くでは頻りに食べたが、肉はほとんど食べる習慣がなかった。これらの食事の中で重労働である農作業を行う体を支えたのは大豆であったのではないかと考えられる。大豆は味噌に加工され、味噌汁として食した。

③ 弁当箱の移り変わり

昔の弁当箱であるわっぱと今の弁当箱であるタッパーを比較する。わっぱとタッパーにそれぞれ炊きたてのご飯を入れておき、児童に観察させる。タッパーにはご飯から出た水蒸気が冷えてできた水滴がたくさんついているが、わっぱは水滴をわっぱ自体が吸収し水滴がついていないことがわかる。水滴がつくとご飯が水を含んでおいしさが減少するため新しいタッパーより古いわっぱの方がご飯が美味しいということになる。ただし、タッパーは安価に大量に作る事が可能であり、汁気を含んだものを入れても漏れることがないという利点がある。

④ 氷冷蔵庫について

冷蔵庫は上に氷を入れ、下の冷蔵室を冷やすようになっており、氷は毎日補給しなければならず冷やせる時間も8時間程度であった。氷は氷屋から購入し、主に精肉店や仕出し屋などで使われていたが、氷を売りに来る地域では一般家庭でも使われたようだ。氷冷蔵庫を使っていた当時では、食料品は毎日その日消費する分を購入しており、そもそも農家では直接畑から採集するため冷蔵庫の必要性が低かった。昔の人にとって冷蔵庫はあまり重要ではなかったといえ、ライフスタイルの変化が冷蔵庫の重要性を変えたともいえることを解説する。

⑤ 石臼について

石臼は粉にする道具であり、そばの実をそば粉に、小麦を小麦粉に、大豆をきなこにするなどの例をあげて解説する。後ほど、大豆からきなこを作る体験活動をする。

(3) 住生活

ここでは明かりと暖房のつくりや変化などについて解説する。また、水くみとその道具についても触れる。

① 明かりの道具について

明かりの道具は古いものから、油皿、燭台、手燭、鈎燭、てど（手あんどん）、ランプがあり、今回のテーマに正しく合うのは、てどとランプであることを話す。

明かりという児童はまづろうそくを思い浮かべる。しかし、農家にはいろいろがあるのが一般的なのでいりり以外の明かりは必要なかった。いりりは家族が集まる中心にあり、明かりの他に、暖房にもなり、ご飯を炊いたりする台所の働きもあった。ここで、いりりの上にあり、伸び縮みして火力調整ができる自在鈎の使い方について解説をする。また、ろうそくやランプは主に都市部で使われ、昭和30年代くらいまで利用されていたことを知らせる。

② 暖房の道具

前述の通り、農家の場合はいろいろが暖房の道具となる。いろいろのない部屋や都市部などでは、木炭を燃料とする火鉢や行火を使ったこたつを利用していた。また、都市部では薪ストーブも使われたが、資料がないため割愛している。木炭の良いところは煙が出ないことであるが、火力が高いわりには熱が伝わりにくく火鉢などでは手をあぶるくらいがせいぜいであった。こたつはこたつ檜の上に布をかぶせ、中に行火を置く。当然むき出しの行火ではやけどや火事の危険性があるため、かごをかぶせていたという。また、下北地方では倒れても炭がこぼれない安全行火という道具もあり、実演しながら解説する。

③ 水くみについて

パネルを見せながら、何をしているところかを問う。写真は井戸で子供が水くみをしているところで、児童もすぐに水くみの様子であることに気づく。そこで、井戸の様子と水くみをしている人の年齢に注目させる。写真の人物は児童と同程度の年齢の子供であることから、そもそも水くみは子供の仕事であったことを知らせる。写真の井戸はポンプ式ではなく、つるべを落としてくみ上げるタイプであり、井戸は各家庭にあるわけではなく何件かで共同で利用していたため、汲んだ水はある程度の距離を運ばなければいけなかった。そのために使ったのが天秤棒と水おけで、水おけに水を汲み天秤棒にかけて運んだ。天秤棒の鈎を手で持つのが工夫になっており、天秤棒をかけた首と鈎を持った手の力の両方を利用する。持ち方を解説して後で体験させる。

4 おわりに

移動博物館・出前授業の目的はあくまで学校側のめあてを達成することにある。これまで述べてきた解説内容には民俗学的には曖昧にしているところや正確さを欠いているところがあるかもしれない。しかし、歴史を学習していない児童に細かい内容を理解することは困難であり、正確さを追求することによって本来身につけさせたいねらいが達成できないのであれば本末転倒といえるだろう。対象の児童に生き生きとした生活の風景をイメージさせることを目標とし、その先に博物館に親しみをもち、博物館を好きな子供たちをつくることができると信じて、これからもこの事業に取り組んでいきたい。